原南陽　医案⑤

一本町六町目、商家の女児、九歳。俄かに腹痛、昼夜啼泣す。其腹、手を近づくべからず。数医を経て治さず。一啞科来りて、日々大炷艾を以て腹部に灸すること連日。益々困苦す。食を欲さず、二便不利、腹鳴水声の如し。後数日を経て、臍中より膿を出だす。

予を迎う。腸癰なり。疲極羸瘦、腹大にして蜘蛛病の如く、瘦せて疳候をなす。只その遅きを如何ともすべからず。父母曰く、臍口閉じて膿出でざる時は腹痛す。其の苦脳見るに忍びず。死は其の分なり。愚以為らく、下すに遅しと雖も、腹満と腸癰と皆下法にあり。

仍って甲字湯に大黄薏苡を加え二貼を与う。翌日、大便膿を下す。さらに前剤を投ず。二三日膿を下して腹満漸減し、臍中の膿収まり、口を歛す。又日を経て膿尽き、起歩するに至り、飲食を節にし、半ば愈を得たり。盗汗羸瘦依然たり。仍って弄玉湯に転じ八月より正月に至りて全痾す。